

研究報告 3

持続可能な酪農とアニマルウェルフェア ～イギリスの事例から～

高知大学教育研究部人文社会科学系准教授 柴 英里

家畜福祉先進国のイギリスと RSPCA の取り組み

イギリスはアニマルウェルフェアの先進国とされている。近代畜産における家畜の飼育法、特に集約的な畜産に対する批判が公になったのはイギリスからである。家畜の飼養管理の基本として、「5つの自由」の概念を提供したのも1979年に設立されたイギリスの諮問機関であった。「5つの自由」とは、「飢え、渇きおよび栄養不良からの自由」「物理的および熱の不快からの自由」「苦痛、傷害および疾病からの自由」「通常の行動様式を発現する自由」「恐怖および苦悩からの自由」である。これを推進するのが民間団体の RSPCA (王立動物虐待防止協会: the Royal Society for the Prevention of Cruelty to Animals) であり、1840年にビクトリア女王から「王立」の称号を与えられた。

RSPCA では主な家畜種のウェルフェアを農場からと畜場

までカバーし、RSPCA の内外に家畜に関する情報や助言を提供し、後に紹介する RSPCA ウェルフェア・スタンダードの開発と改定などに取り組んでいる(資料1)。今回お話を伺った RSPCA の家畜部門の担当者ホーガン氏によると、科学的根拠、実践経験、専門家との議論に基づき活動を行っている点を強調された。

RSPCA ウェルフェア・スタンダードは公開されており、ホームページでも参照可能である。乳用牛を含む10畜種で設定され、現行の法律やスタンダード以上の飼養管理とケアが発信の軸であり、より良い飼養管理や理想的でベストな飼養管理やケアを示す「設計図」となっている。継続的な見直しも行い、必要があれば改定もしている。

ウェルフェアスタンダードは主に、RSPCA の下部組織にあたる RSPCA アシオアードで活用されている。RSPCA アシオアードは食品に対する認証スキームで、より高い水準のアニマルウェルフェア食品を求める消費者の要請に応じ1994



RSPCA 本部の外観



RSPCA の家畜部門では、エビデンスに基づいて活動を行う

〈資料1〉

RSPCA 家畜部門 Farm Animal Department

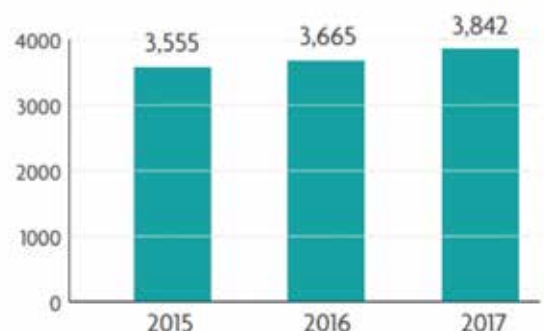
- 主な家畜種のウェルフェアを、農場から、輸送、と殺に至るまでカバー
- RSPCA 内外に対して家畜に関する情報・助言を提供
- RSPCA ウェルフェア・スタンダードの開発・改訂
- 食品産業・農業界のステイクホルダーとの交渉
- 家畜のアニマルウェルフェアを改善するための研究・事業に参加



食品に対する認証スキーム RSPCA アシオアードのロゴ

〈グラフ1〉

RSPCA スキームメンバーの推移 Total number of members by year



年に設立した。RSPCA 独自に認証した牧場から食肉処理場などまで、すべての段階でアニマルウェルフェアを目指したイギリスで唯一の農場認証システムである。「5つの自由」に立脚し、家畜の飼養改善と高いレベルでのアニマルウェルフェアの達成を消費者に示すものとして開発した。

RSPCA アショアードの認証は、まずは RSPCA アショアード内部の評価会組織担当者が実際に農場などに入り、スタンダードに適合しているかを監査する。適合を認めると、RSPCA スキーム・メンバーとして登録される。スキーム・メンバーには農業従事者や農業経営者、運送業者、食肉処理場などが含まれる。近年メンバー数は増加の一途を辿り、2017年には3,842人が登録された(グラフ1)。認証後も年に1度、適合を維持しているか評価担当者が監査する。またメンバーのうち、年間3割ぐらいが抜き打ち検査の対象になる。

小売業界の付加価値創造が主導 イギリス内の「家畜福祉」認証商品の広がり

イギリスの大手スーパーマーケットに目を向けると、1990年代以降の欧州では消費者の購買行動としてスーパーマーケットを信用する風潮が強まり、大手小売主導のフードチェーン開発が盛んになり、PB商品も小売主導で開発されるようになった。スーパーの経営戦略としても単に価格競争だけでなく、消費者にとって安全・高品質な商品訴求を強める戦略商品として有機食品やアニマルウェルフェア食品を位置づけ、取り扱いを増やした。環境に配慮した環境持続型農業や有機農業、動物福祉の実現に協力することが、企業・小売業の社会的責任としても認知されるようになった。

RSPCAの認証食品には、卵や鶏肉、ハム、ベーコン、ソーセージ、牛乳などがあり、イギリス内の主要なスーパーで取り扱いが増えている。中でも牛乳は、M&S(マークス&スペンサー)という大手チェーンが2017年にRSPCAアショアード認証製品として初めて取り扱いを開始した。これは小売業界においても初めての出来事となった(資料2)。

代表的な流通チェーン以外の小売業者が家畜福祉をまっ

〈資料2〉RSPCA Assuredの対象となる食品

- ・ 鶏卵 -Eggs
- ・ 子羊の肉 -Lamb
- ・ 鶏肉 -Chicken
- ・ 七面鳥の肉 -Turkey
- ・ サーモン -Salmon
- ・ 牛肉 -Beef
- ・ サケ -Trout
- ・ 子牛の肉 -Veal
- ・ 豚肉 -Pork
- ・ 牛乳 -Milk

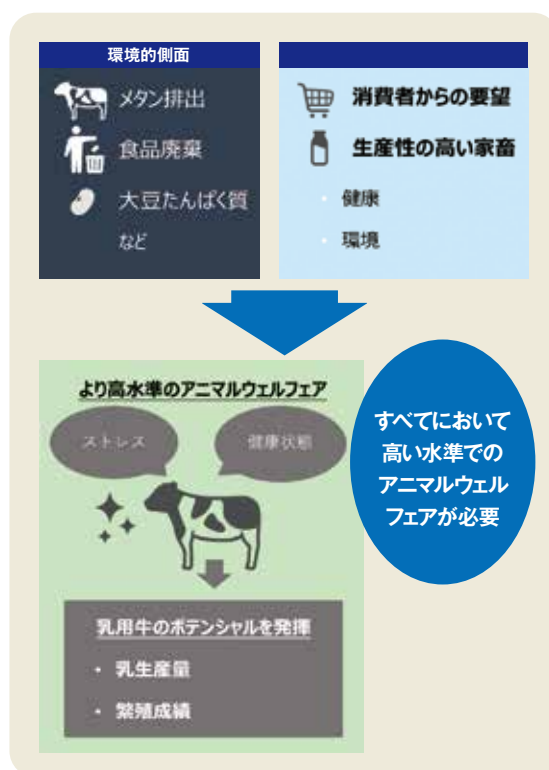
たく考慮していない訳ではなく、小売業界にはアニマルウェルフェアの取り組みを評価する CIWF という別の民間団体もある。また Sainsbury's という小売チェーンは、ソイル・アソシエーションという RSPCA とは別の組織でスタンダードに準拠した展開も行っている。このように動物福祉の取り組みは、各スーパー独自の認証も含め小売業界では裾野の広がりを見せている。

家畜福祉の追及が酪農の経済性を向上 先進国・イギリスの論理

酪農における持続可能性とアニマルウェルフェアの関係を RSPCA に尋ねたところ、環境的側面や経済的側面など考慮すべき分野は多数あるが、RSPCA が関与するのは主に経済性の側面である。消費者の要望や生産性の高い家畜の重要性を認識した上で、すべてにおいて高い水準でのアニマルウェルフェアが必要という回答だった。より高い水準のアニマルウェルフェアを実現することにより、乳用牛のストレスが減り健康状態が良好になる。その結果、乳用牛のポテンシャルの発揮につながる。ポテンシャルの発揮について具体的には、生乳生産量の増加や繁殖成績の向上がある(資料3)。これは日本におけるアニマルウェルフェアの考え方に対応した飼養管理指針の方向性とさほど違わないと思われる。

さらに RSPCA は、アニマルウェルフェアがどのように経済性・生産性の向上に関係するかデータも示した。イギリスの牛群では常時30%が跛行^{はこ}状態であり、これが乳牛淘

〈資料3〉酪農における持続可能性とアニマルウェルフェアの関係



汰の理由の10%を占める。1事例あたり178ユーロ(約2万4,920円)のコスト増の要因となり、泌乳期においては360kgの生乳生産ロスにつながる。乳房炎も毎年新たに100頭中30頭発症し、乳牛淘汰要因の13%を占めている。これも毎年1頭当たり70~200ユーロ(約9,800円~2万8,000円)のコスト増の要因となる他、発症以降、生乳生産ができなくなり経済損失を重ねると分析している。また家畜が痛みを感じている状態は消費者にとって受け入れがたい状況であり、産業にとってマイナスの社会評価につながりかねない(資料4)。

*跛行=歩くとき体重を支えきれず足を引きずって歩く

持続可能性の実践教育素材として、酪農乳業の取り組みにある魅力

酪農・畜産においては食品安全や家畜衛生、環境保全、アニマルウェルフェアなど「見えない価値」が持続可能性において重要な要素だという議論は日本にもある。その上日本の酪農では、「教育」への貢献もある。そこには3つの柱が示される。1つ目は「動物と触れ合うことでいのちの大切さを学ぶ」、2つ目は「動物に触れることで癒しの効果」、そして3つ目は「農場を見て、そこで作られたソフトクリームを食べ、牛乳を飲むなど食体験」である。

今回イギリス調査を振り返り思うのは、生産者や乳業メーカーはアニマルウェルフェアに限らずいろんな取り組みを行っているため、このような取り組みを包括的に学べる教育ができるのではないかということである。酪農を入り口として持続可能性を学ぶことが、酪農の価値への理解にも

つながる。酪農や牛乳乳製品と消費者をいかに結びつけていくのかを考えたとき、次世代の消費者を育成する上でも学校教育が果たす役割は非常に大きいものと思える。

(資料4) 適切な飼養管理

